

特集

乳幼児向けのプラネタリウム実践報告

山口 菜摘（福井市自然史博物館分館（セーレンプラネット））

1. はじめに

当館では子ども向け映像番組やオリジナル投映など、さまざまな子ども向け投映を実施している。日々の投映を行う中で、乳幼児連れの家族がプラネタリウムへ入られた際に、乳児が泣いてしまうという大きな課題があった。これは子ども向け投映に限らず、全ての投映における課題でもあった。そこで、周囲の目を気にせず、気軽にプラネタリウムを楽しんでもらえるプログラムがあれば、その投映を目的に来館していただけるのではないかと考え、乳幼児向けの投映プログラムを実施することにした。このプログラムは「ベビープラネタリウム」とし、星を眺めるだけではなく、乳幼児と家族が触れ合いながら星に親しみ、かつ、乳幼児の精神的・身体的発達にも繋がることを目的として実施した。

2021年度：年3回実施

2022年度：年4日で8回実施

2023年度：年5日で9回実施予定

2. 2021年度ベビープラネタリウム実践報告

新型コロナウイルスの影響で定員を減らしていたため、通常150名定員のところを、60名定員とし実施した。初めて実施した日には、当日の朝からチケット販売をしたところ、定員以上の並びとなり、チケットを購入できないお客様がいたため、次回からは電話での事前予約のみとした。これにより、チケット購入に対する不安なく来館していただけるようになった。また、広報用のポスターは、実際の乳幼児の写真をポスターに使用したり、「泣いても、笑っても、お話しても大丈夫」という言葉を入れたりすることで安心して来館してもらえるような工夫をした（図1）。



図1 2021年度ポスター

2.1 環境面や投映内容での工夫

たくさんの乳幼児が来館することを想定して、ベビーカー置き場を臨時でプラネタリウム内前方のステージ側に設置した。前方に設置することによって、スタッフだけではなく、お客様の目も行き届くので、安心して投映を楽しんでいただけた。また、感染症対策のため、家族同士の座席の間隔を空け、スタッフのマスク・フェイスシールド着用を徹底した。

投映では、各場面で大人は乳幼児の手を持ちバンザイをしたり、乳幼児の体を持ち上げたりしている姿も見られた（図2）。発言できる乳幼児は大人が伝えたことに対して、おうむ返しをしている姿も見られ、星に親しみながら親子のコミュニケーションを楽しんでいるようだった。



図2 親子で体を動かしている様子

3. 2022 年度ベビープラネタリウム実践報告

2021 年度の実施では、たくさんのお客様に来館していただいたことや予約がいっぱいで来館できないお客様がいたことから、実施回数を年 4 日にし、1 日の投映回数も 2 回に増やした。また、定員も各回 80 名とした。回数や定員を増やしたことによって、1 回目に来館できなかったお客様からも 2 回目、3 回目に来館できたというお話をきき、満足度も上がったように感じた。

3.1 環境面と投映内容での工夫

定員が 80 名ということもあり、投映開始直前の混雑が予想されたため、臨時の受付を設置し、混雑緩和を図った。また、プラネタリウム内の壁にはスタッフが製作した星のおり紙を貼り、乳幼児が入りやすい雰囲気を作った。星のおり紙を見て「キラキラだね」と大人の方が子どもに伝えている様子も見られ、親子のコミュニケーションのきっかけにもなっていた。投映の最後には家に帰ってからも星を忘れないでいてほしいという思いから、星のおり紙を乳幼児に選んで持って帰ってもらった。さまざまな色のおり紙があるが、はっきりとした色の赤や青、緑を選んで帰る子が多かった。

2022 年度以降のベビープラネタリウムではテーマを設定し、それに合わせた場面展開を考えた。乳児期は赤や青、緑などのはっきりとした色を認識しやすく、脳を刺激することで視覚の発達に繋がるため、2022 年度のテーマは「色」とした。よりはっきりとした色を各場面で使うことによって、乳幼児の視覚的な発達に繋がったと感じた。

3.2 投映内容に関するアンケートの実施

今回から内容向上のためにアンケートを実施した。アンケートは子ども 1 名につき、1 枚記入してもらおう。来館者全員に記入しても

らうことはできなかったが、親子 156 組に回答してもらい、回収率は 61% となり、来館していただいたお客様の生の声を聞くことができた。今回は色を意識した投映だったので、アンケートの項目に『どの場面でお子さんが反応していたか』を記載した。色を意識した場面は全部で 4 つあり、①色照明の場面（どの色が好きか手を挙げてもらう場面）②虹の場面③お絵描きの場面（星座の場面）④オーロラの場面⑤その他の項目で分けた。

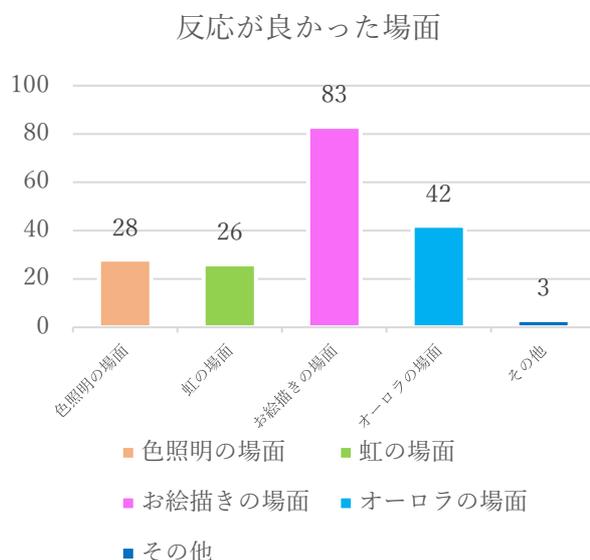


図 3 アンケート結果

この項目は複数回答可にしていたが、156 組に回答してもらった結果、約半数以上がカラフルな星座が出てくるお絵描きの場面での子どもの反応が良かったと回答した。

考えられる理由としては、できるだけはっきりとした色を使い、視覚的にも分かりやすかったこと、乳幼児に身近な動物の星座を取り入れ興味を引き出せたこと、「どんな色が好き」という曲と一緒に星座を動かし、表現したことなどが挙げられる。「色」だけではなく、「動き」や「動物」などを取り入れることで、さらに乳幼児の認識力も育てることができると感じた。

4. 2023 年度ベビープラネタリウムについて

今までの学びを活かし、昨年度のテーマ「色」から「模様」にした（図 4）。星の動きを使って空にさまざまな模様を作り、乳幼児の追視力や色認識を育てていく。また、乳幼児は顔のようなイラストを好む傾向があるので星に目や口を描き、星のイラストを認知させ、空の星へと繋げたいと考えている。



図 4 2023 年度ポスター

5. おわりに

引き続き、ベビープラネタリウムのアンケートを実施し、さらなる内容の向上を目指す。

また、ベビープラネタリウムの関連イベントとして、星空の下で乳幼児と親がヨガをするベビーヨガの実施を予定している。幼稚園等を対象にした「星育」というプログラムも充実させることで、乳幼児の自然に対する興味関心を引き出し、さまざまな力を育てていきたいと考えている。

はじめは乳幼児連れの親子が利用を遠慮しているという課題から始まったベビープラネタリウムだったが、内容を考えていくにつれ、親子で触れ合いながら星を眺め、親子一緒に星で遊んで親しんでもらうだけではなく、乳幼児の精神的・身体的な発達を促すことに繋がったと感じた。乳幼児期のプラネタリウム

での親子の体験が後の幼児期への発達に繋がりを、表現力や想像力といったさまざまな力を育てることができるよう今後もこのような活動を続けていきたい。

6. 質疑応答

本発表を行った中部支部会での質疑応答の内容を紹介する。

Q: プラネタリウムに来館する理由として、癒しを求めて来館するお客様が多いと思ったが、お客様の反応はどうか？

A: お客様の反応としては「楽しかった」「星を見て癒された」という声が多かった。当館では親の癒しよりも親子の触れ合いや乳児の発達促進を目的としている。

Q: 星を認知するのは何歳ぐらいからか？また、見るとすれば何歳ぐらいからか？

A: 各個人の発達段階や環境によって変わる。個人差はあるが、月であれば3才児も見つけたことがあった。今後、そのような点も調査していきたい。



山口 菜摘

n0835yam@goto.co.jp